

曙

上

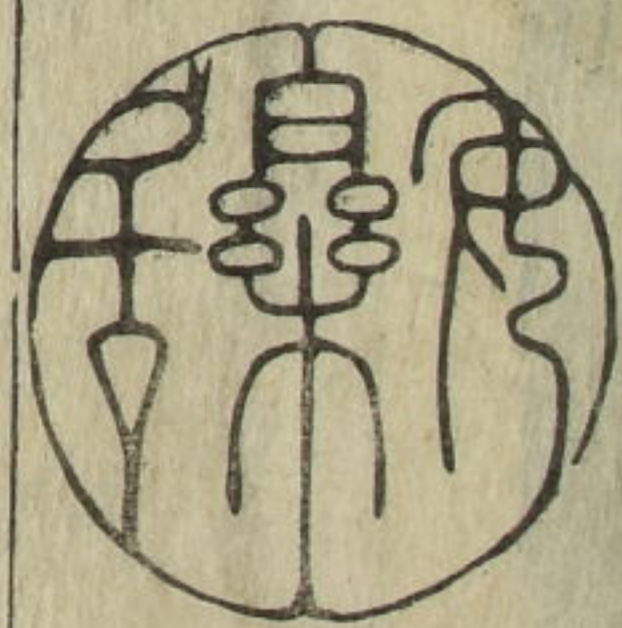
7
1110
1



明 卷 1110

寬政辛亥新刻

新井白蛾先生著



闇乃曙

平安書林 博厚堂梓



闇曙序



夫以有州則有人之人必有聖人而教誨人之為人之道制作治天下之則於是人倫五常之乃矣禮樂刑罰之具備矣上古之民淳朴而能守教令能慎自家及世之久則人氣漸漓人情寢薄異端起焉將又逮澆季之世則人情滋降故乘其氣幾而惑世誣

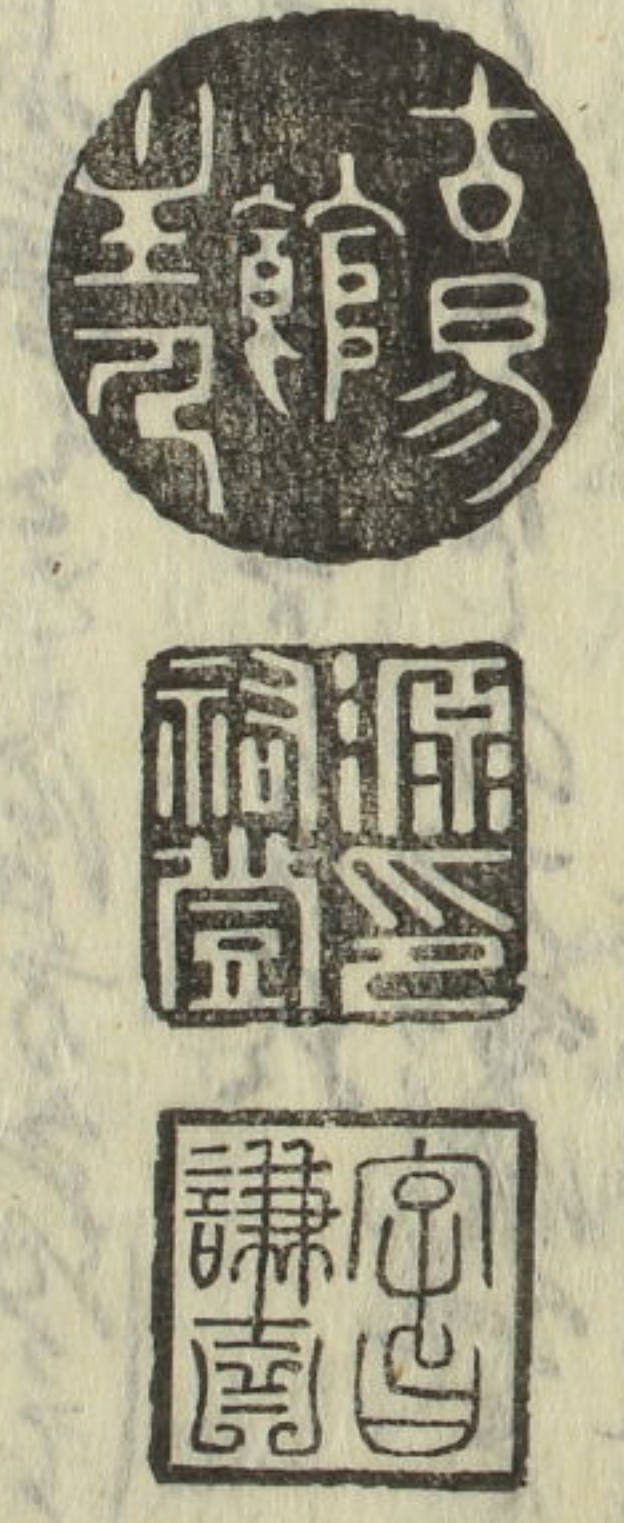
序

初

民之賊多益多固此爲之左瑣雖不足齒
牙而今方世俗爲彼被扇惑迷敬志信于猥
拙妄作之徒輟者不少觀其輩便猶入深山
坐霧裏也予不忍見之亦不勝痛之是於今
辨其俾衆俗喪心理之蠹術以示癡直以喻
罔醉蓋欲以提省陷溺眩迷于邪路者庶幾
讀者曉會醒解聖教之指焉是編積塵始十

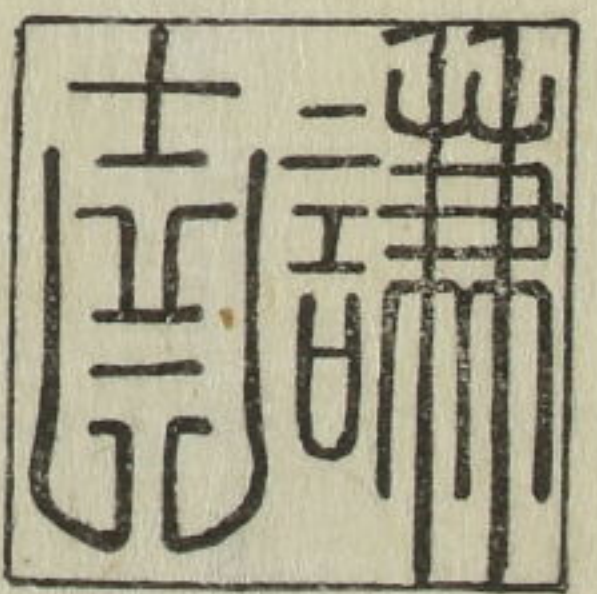
年或延日屢需公于世仍題一語贈之耳

新井祐登謙吉撰



寬政元年己酉夏四月

却て勇を智の者まゝ是あり者の上記の意を
 指しうらほあふむを治るる廉なりびりりか
 の中事とのふくまは地は事し律と終るを
 代格より智徳徳なり聖なるもの地なるは
 一と名也



闇乃曙上巻

新井白鐵 著

孟子曰徳善不立以爲政徒法不能以自行と云ふなり
 此言や亦れ天下由家小ありて徳徳一ありて
 徳ありて徳善の切要あり先づ徳善を立しむるは
 なるをまゝし入らざるもあつて徳善は徳徳一ありて
 事なり徳徳一ありて何の利もなきなりと云ふなり
 のことありて徳徳一ありて徳善は徳徳一ありて
 なるなりと云ふなり天下は政人徳の行ふ徳徳一ありて
 徳入天下に徳徳一ありて徳徳一ありて徳徳一ありて

法とて守り行ふまはるる毎のこのよの世に不
 測と世に不測と極く居る縁とある事と
 世に信じての作りある如くありと母念の
 事ハ勝れぬ事一考く分け法事と理と
 平生のまじり親しき事との事との事との事
 西も道理を知り左の法後おまじり
 は統善法より建ひゆて無言の本に明徳と
 多く見ゆべし

○世に曰くを記法はるる統をならして
 其の旨の信物者より極くありのよの世に

家本をまじりて本親と本親とありて
 崇りてありてのよの世に
 く文有なる人より
 年と齒かけのよの世に
 一寸毎に先相親する事と
 本を親せしむる事と
 世にありての事と
 ありての事と
 ありての事と
 ありての事と
 ありての事と

とぬやうに造りて是ごとく作り今茲和者とのすのし瀛
化務く事なる竊頼誠信一和と建出しく夜間更
たしく夢夢の如く方人の事

竊頼の外風水乃考へとい著る是も二年迄出
る起る工業事と考へふいふの事一分事も志る人
少くは我れともおし訪ひ来りぬ一日を説く
和子とい其れ何と志ぬ亦り按記の易と定ぬ
それ志て風水乃事を述て人説欺き地理風水
地理全書といし座なる其れを定ぬらまよはさま
是人事成欲其後へといと云て愛ひしなりぬ

○愚人を欺き遊ぶ及具定金神の業り尤世不長け
金神も去方金神なるもの化りのまを説く曰創先向
云はば少くも去方づは毎に其金神も西又唐不志
然も金神を扱ひ其れなり合て意方の其甲(銀先)の
つりる事あり彼等といふは事と志る意方やて宿ぐ
まぬ人といふ事ありて前意を欺き味かける也年迄
ばり其の大坂を藩藩を千目迄不金神醫者と云ふ其
醫者なり
西の山伏醫者とも
りてて其いなり宿意約とすありはは病
不金神乃業里のり業不六治はは新結す人とい
すむしこれと云ふ病家た建けしと云ふ人なり也

そとに成りてはたゞかげりやふ忽ちまがひ忍れ
祈禱をせむの事一全神陰の祈禱を氣部と大驗者と
引合せし極一と名を言する山伏京四束と云ふ事と書
け事と知人のあはれ相稽なりや禱り禱りけ醫者
文字成なりと事とせし一教予がた板乃成事とた文
書はのれと事とせし一今た死しくそはとも断絶せ
やせぬ程なりとも兼指さる事とせし一何人の定ま
事と問ひかたる極一

佐下徳一いふ全神は八岐大蛇が毒を飲すれば全
神の一名を蛇毒氣神とものたあり又陰陽者院小

て六巨旦天王の體魂ありとの言妄説なり全神は
素盞烏言をありなり歳徳神と指回媛なり是神
秘なる也も世俗の惑ひを起しるなり記と也一後三神
後かとも右二神は言くありふ事なりふ今世未
可月のとも徳神と云ふなり

○本教寺鬼門角と闕一其辨は若傳拾葉と云
書に見くらし

○坂井恒齋とのいふ右の全神醫と云ふり故に入りの
禱り突をなきの事ふかひしなりと云は見獄の記の
形り人の禱りせし病癒して全神なりと云ふといふ

事...
○...
予曰...
醫...
て天下...
文...
蓋學聖人之道...
心之體也...
故見正理...
則知正理...
聞正理...
則識正理

自然...
深如...
見定...
即心...
乎...
確乎...
明者...
有四...
正法...
補助...
一驗...
亦救...
天下...
一蒼...
生是...
聖人...
仁

周易

術之餘澤愛而不措也。如千金外臺載咒法者，周禮之遺法也。然漢以來，風俗年降，人情月陋，自魔魅和尚、伏魔法師、咒祝巫覡、占兒鬻相、風鑑地理、類至攫徒拐兒、鼠竊白撞、剪絡之徒、詖淫妖妄之說，紛然競起，惑世誣民，其徒至今日既極矣。皆是頑愚凶惡、蠱惑頑愚、駑鈍頑鈍、汚下者，不幸遇之，則見迷瞽扇動，且信而不醒，稱奇談妙駸々然，陷溺彼機殼之中，不知為知者之笑具，豈可不痛乎？余常云：斗筭庸凡，何奇何妙之有？倘曰有之，自古賢哲君子皆是癡心漢耳。蓋王右軍妙書者，筆法

之熟也。吳道子奇画者，畫法之熟也。易曰：精義入神，是天下萬事。曰：奇曰妙，皆如是而已。蓋如醫士以今論之，所謂聖制醫門之正法，用之病家，竭心盡才，猶未奏其功，則可辭而去也。惡求微纖，左術卑陋為乎？昔在有行大宛者，至沙漠千里，忽焉見彩石如玉，下馬採之，如大麥粒，似瑠璃，喜愛尚求之，行五十步許，又得一牧，似珊瑚，進步尚求，又得一牧，似瑪瑙，懵然漸進行，不覺百里，逮日沒而心始驚，顧乘馬莫所見，四面霧籠，及照亦已絕矣。仰天悲歎，不知前途，嗚呼！世之輕短憤眊，喜愛

同書
二

あのがらう障かきしるも振き守りて一古方ふ
 のうたひのしるもえんがたの美心
 一從己從心も忘る
 のうたひのしるもえんがたの美心
 のうたひのしるもえんがたの美心

又是も二年迄はなり若くは世に徳知り万某如
 と候すは傍を取ら来りて方位乃事なりや早白それ
 は予は同人之也快遊入りひ多し一庫一中央世東西何空を
 南如と經て是くする具りくやわの意れ如く六隣
 の森れ東如く我家乃片隣乃志南如くと云へ
 或人曰城門角と注出て作るやと云へ

○字畫の古ひより左百家名書といふ書中亦謝氏相

字畫と云書を古ひに於てはひを氣束るへ何といふ字ふれ
 向方のやひは字とかをを字は偏傍と云はれ
 増減減増と用てそれと判断するなり
 例を素小徳に是くし

按ずるは事もよりて或 形も傳へ候ひ若難
 捨遺ふより其くその難はなり

○書畫も難はなり聖賢の法はなり一書は法
 而後以て世に不周をなすもの一文字とかをて見ると
 一書は圓とかをて名に違ふ也を法八卦を割付て其れ
 圓と形も又圓と名も一書は筆の始りなり

首飾のひとしきりの止りかけは片時のおひきり童
装の九折の衣冠記などとも書きの事と云着たはら
きよもゆくの花押乃すも舞も大抵同様のもの

書家代傳丹陰陽活筆乃墨通と見ゆ事ゆりか
定別して細妙乃要なり然れども世俗間通其奴
書を腕の如くさしゆるは是片右の右の者ゆり
色く雲縷の遠ひありと知

○近世親相とて刀杖機及杖身と云片右剣と云凶親と名
付て俗人ともゆりつと奸巧妄曲乃徒ゆりも片右を
い片右天の八卦と稱ゆり順より付八卦の道は片右

劍相

地われそを色はれを凶をのひを紙なすも片右と云片右
所下底の裏は片右の障り書たてし底も片右宗匠と云片右
書乃石塚と云片右扱は常りとも刀杖目利志乃片右
たのし記の如きも片右片右と云片右片右片右片右
地あまもなけも片右片右と云片右片右片右片右
の右親乃合紋と云片右片右と云片右片右片右片右
も片右片右片右と相違と云片右片右片右片右片右
片右片右片右片右と云片右片右片右片右片右片右
めじと云片右片右片右片右片右片右片右片右片右

もあつて首尾不^や一致^ぎに役^や儀^ぎをわけらまてゝるもまた又^やな^ぎを^ぎ
 策^{さく}の^{さく}河^か内^{ない}宮^{みや}玉^{ぎよ}冊^{さふ}乃^の昭^{しやう}考^{かう}を^を示^し月^{げつ}眞^{まこと}と^と書^かせ^し刀^{たう}光^{かう}女^{にょ}
 に^に切^き殺^{ころ}され^るべ^しと^と人^{ひと}知^しる^もか^か振^はる^事多^たかり^下之^之
 人^{ひと}を^を何^{なに}ぞ^ぞ人^{ひと}周^{しう}古^こ人^{ひと}京^{きやう}と^と今^{いま}の^の首^{しゆ}人^{ひと}あ^あり^ある^人
 誠^{まこと}て^て刀^{たう}光^{かう}す^す人^{ひと}と^と備^ひへ^へ性^{しやう}不^ふ合^あ方^{かた}の^のあ^あせ^せの^の庭^{てい}絶^{たつ}
 る^る是^{こゝ}を^を能^よく^く切^き断^{たつ}す^す人^{ひと}と^と備^ひへ^へ制^{せい}を^を外^{がい}に^にの^の
 上^{かみ}事^{こと}は^は神^{かみ}曰^{いは}勝^{かち}久^く新^{あたら}形^{かたち}詔^{みことば}臺^{たい}に^に行^ゆく^も
 開^{ひら}き^きと^とう^うる^るた^た好^{この}書^{かき}也^{なり}叔^{しやく}唐^{たう}人^{ひと}と^と今^{いま}
 と^と今^{いま}唐^{たう}人^{ひと}と^と用^{もち}ひ^ひら^らる^る京^{きやう}人^{ひと}と^と今^{いま}
 乃^の後^ご天^{てん}乃^の漢^{わん}尺^{せき}又^{また}劍^{けん}尺^{せき}又^{また}我^{われ}
 朝^{あさ}衣^いの^の後^ご尺^{せき}又^{また}能^よく^く

尺^{せき}と^とは^はれ^れん^ん八^{はち}寸^{すん}漢^{わん}を^を漢^{わん}を^を曲^{まが}尺^{せき}尺^{せき}九^く寸^{すん}を^を漢^{わん}の^の何^{なに}
 とも^{とも}わ^わる^るた^た也^{なり}右^{みぎ}劍^{けん}相^{さう}も^も唐^{たう}人^{ひと}後^ごも^も能^よく^く
 今^{いま}て^て中^{ちゆう}心^{しん}の^の事^{こと}除^{のり}の^の尺^{せき}毎^{まい}海^{かい}な^な一^{いつ}減^{げん}と^と首^{しゆう}尺^{せき}
 果^{あん}獄^{ごく}所^{しよ}の^の説^{せつ}ひ^ひ也^{なり}

今^{いま}て^て老^{らう}人^{ひと}の^のし^しり^り相^{さう}州^{しゆう}大^{だい}山^{さん}の^の不^ふ勤^{きん}を^を州^{しゆう}林^{りん}葉^{えつ}山^{さん}を^を
 在^あり^り初^{はつ}末^{まつ}た^たち^ち石^{いし}律^{りつ}の^の物^{もの}を^を是^{こゝ}に^に正^{ただ}す^する^るは^は
 皆^{みな}わ^わら^らう^うの^の事^{こと}を^を知^しる^もと^と秦^{しん}納^{なつ}す^する^る也^{なり}
 今^{いま}と^と夫^{その}を^をて^て凶^{きゆう}賊^{さく}と^とは^は秦^{しん}納^{なつ}す^する^る也^{なり}
 誰^{たれ}ぞ^ぞ能^よく^くと^とし^しの^の形^{かたち}と^とる^るを^を知^しる^もと^と秦^{しん}納^{なつ}す^する^る也^{なり}
 目^め利^り正^{ただ}す^する^る也^{なり}

の奴にりやのふあゝ孫に是る月との刀をのこ
 けはを無流の者て一話と危敷に系よ之夜をき
 との刀は格好のいし男丹波守を名作の刀せよ不
 りの刀を古銀葉の貴物とめてお侍生持美
 求めは心見せられを彼去れ日は前人の言持て何
 なるも愛侍のや言て曰先方は性故にやれは言合子
 持世由用を交へ付て愛中しは是れとて去れ去れ曰
 古銀持たうと愛せらる格好古銀葉とてお
 成る貴れ切らふて事是れは古銀かぬも
 とて去れとされと語りぬ早見と武ととえお

○お入生盡死美の役を同言善く是もいふをは誠
 粉せんのる身虚妻なる御意なのて全強と會りかす
 者たる又生得と絶不才と心程とあはれとてを聞て
 心程と通せん己れつやと振きおめて格すおち又ハ文首
 白庭ゆえ流狸小はすうとねもをて一振あつては理明か
 たりんといて其執と知まき事と愛し物持るを徳のやう
 おれも信て愛せし一お豪意へ出入する格好の格好
 事といふのさ者好く生盡死美なのさあ悪くおのん
 誠意とては言ふ人念と美とて妖怪の奴となりたるの之扱
 大豪意の主人妻を信る事とて格好とていふ人

形は外世類の事は何れもたまに家記の補成
が其一系に於て精しく中化して大衆を導くた
是れを以てして一歳を奉り財と遠く死ねば
夫れ終末なりとの心成るべしと昔は此の
之を以て始て何れもたまに持れども
中化の心と内化の心とを以てして
捧後

後世の心と云ふは中化の心と云ふは
世作の心と云ふは内化の心と云ふは
中化の心と云ふは

○人死して後靈を以て天を感動す今世の
中事と死後何れ格別な事と死して氣凝結して
子細もその事あり終りを凡世の心成る
何れ靈を以てして左傳文平八也史人善民共而
宣う四年若教民之鬼怪求食又史文天祥奇書の
事多し其心成る見たりと云ふは今世の作
傳たは中世靈乃浮現なるを信するは其
愚婦の愚昧なり此を以て心成るを以て入るの事
ありて少くも自ら覺る理をも明らざる事あり
又少後靈事不覺後生の事ありて中世靈を以て

言て後乃道と具合を以り

○狐狸小化法を東大附々といふ事高岡と云きも
諸公狐化すといふ事此も各言敷く事一は狐化を
小一戸宿長中といふ血氣はとう入腹れりとも有込食乃
為尺附もと扱二系河東寺所也等作る守善院日來と
ソハハ平々之に起意の以入りは宿やも射も日蓮宗
乃驗者光出く祈禱と約のりも言言てた祈禱も止り
平狐の妖怪と云と事或同く在等う白狐といふ奴は白
の工といふ事神といひ化かなるを其生果といひ死果と
いひて之を懼惑なり祈禱者ともが食物と云て聞ふ以て

狐生は疑ひ深く怨角小膠の加終大祈禱者ら
めも飲くもの祈禱者も及たまこれ仕指すも其後大
道教す持れりも清く一呪と云るもかの祈禱者小呪と云
る事成り得者果は大概はまの事と云りは成るも
手懸と云と云聞ぬれ事也其呪果一也予て之を修下
向の付中の地所といふ所は宗室の運命と有るは信體和
尚曰苗草小ぬ程の如何もわき事ハ致さぬ大御て其宿
を其を其文光經たてて出て讀めりといふ事一は其を其
と云て其の目録也一は其も其後の末寺の如き其て
まるまのりも其を其も其宿の附房小來り益破りて其

く心解人のくくして明徳の忠臣なり志なき事不能
可迷の死にまへ一有るも狐と神と堂ありは類ひと
邪神淫祠と名上其聖人の清代者として見せ殿の事
此也凡法巧邪奸志て人心を迷わすに可く迷ひ邪法
入る者其人心を蠱之害も愚悪の飛入る凡刑罰を
人民と心母等記をくあてん可く蠱と生ずる凡所
の徳喪すの病根なる心を賢人固く懲らむべきもの
第一也

有るはあつとく狐と明神とを異り然るがまはれ
いふくを改め地獄善道ともいへる石動く八観者

牛ももまぐらひひうくと迷ひ神も佛も
まゝまゝのくたま

○大坂前河原場とありて今新橋とすり者も女
小僧とて冠狐と附せらるるの事と傳せしむべき
世に今法と名ありて今法中も女もやめられ
身も迷ひ神も志ありあつとく高言と傳り
扱も下ら更死の多しものく先と信ずる應龍渡た後
中とせび最盲集の貴ひ伝ふ被横たりのかや
替ふてこの清声は徳好信理とありて今法中も
なると称しむるも貴し世も人たつての馬鹿の美の

またこの化儀のよるま今二三巻の上の巻に
也は儀律のよるま今二三巻の上の巻に
うらた下

○凡神号の類は先神祇官の命とてその徳行の功を
撰し神祇官の勅を奉撰福を以て勅文と歎とを
よみて律号勅符の事あり其儀も先代よりありの
よるま高貴の御事なりと果て下より高僧禪宗も
言類の神名と附り事此礼の遊礼なり其の飛刑罪を
述りかくるは罪人也

簡曙上巻 畢

中ノ下ノ事

中ノ下ノ事

